

令和6年度臨床検査総合部門研修会に参加して

公立南砺中央病院 新保卓也

5月25日（土）に富山県医師会健康管理センターで開催された令和6年度臨床検査総合部門研修会に参加しました。令和6年度富山県臨床検査技師会定時総会後に開催され、64名の参加がありました。内容は、令和6年元日に発生した能登半島地震に対して行われた支援活動についてでした。被災病院への検査技師の直接派遣、避難所でのDVT検診や弾性ストッキング着脱支援など様々な活動が行われてきました。講師は、JA長野厚生連北信総合病院臨床検査科の青木静香技師と福井大学医学部地域医療推進講座助教の大西秀典技師の2名であり、その災害支援活動について、それぞれの視点からの報告がありました。

青木技師は、写真や動画を交えて被災地の状況や避難所での支援活動についての報告でした。つぎはぎの道路や片側が崩落した能越自動車道、飛び出たマンホール、基礎から倒れたビル、倒壊した家屋などの被災地の状況がわかる写真が示され、能登半島地震の規模の大きさや被害の甚大さをうかがうことができました。小学校や公民館の避難所では、DVT検診や支援活動だけでなく、ベッドサイドに出向き活動されている様子も紹介され、避難所の状況や支援活動の大変さを知ることができました。

大西技師は、自身の研究実績の内容も踏まえた避難所に関する報告でした。避難所には指定・一般・福祉の3種類があり、それぞれ定義が異なり、それらの開設から運営に関する様々なことを知る事が出来ました。また、避難所では雑魚寝より段ボールベッドが良いという内容のとても興味深い話をされました。雑魚寝生活では、足腰が悪くなり、立ち上がるのも一苦勞なため、活動量が少なくなり筋力が低下しADLが低下してしまいます。さらに、床からの距離が近いので寒いだけでなく、ホコリやウイルスを吸い込みやすく上気道炎になるリスクが高くなります。それに比べ段ボールベッドは、立ち上がりやすく、床からの高さを確保でき非常に効果的であるという内容でとても勉強になりました。

質疑応答では、DVT検診におけるマニュアルや指針、避難所での感染対策やゾーニングに関して、現地での支援リーダーとして活動した大西技師の一番大変だったことについてなど、さまざまな視点からの質問があり、今回の報告会への関心の高さがうかがえました。

私自身も支援活動としてDVT検診に参加させていただきました。避難所への行き来や現地の状況は大変であり、支援活動ではいつも通りの検査とはいかず難渋することもありました。しかしながら、困ったときは一人で悩み考えるのではなく、活動メンバー全員と相談し連携することでチームとして対応することができました。臨床検査技師としてだけでなく、個人として非常に有意義な経験が出来たと思います。今回の研修会を機会に、より多くの技師がこのような活動に対し興味や関心を抱き、参加してもらえれば良いなと思いました。